

婚姻と出産の民俗

(こんいんとしゅっさんのみんぞく)



昭和 30 年代前半の嫁入り衣装

野田市の一部では昭和初期頃まで、本祝言(ほんしゅうげん)を挙げる前に女性が男性の家と一緒に生活をするしきたりがあり、これを「足入れ」といいました。形式的に一日だけ泊まることもありますし、何ヶ月も実家と嫁ぎ先を行ったり来たりすることもありました。こうした「足入れ」という習俗は形は様々ですが、かつて全国にありました。例えば伊豆諸島では、一旦女性が男性の家に「足入れ」として挨拶に行くと、その後しばらく男性が女性の家に通うことが認められます。このことから、日本の婚姻制度が、いわゆる妻問い婚・婿入婚から嫁入婚へと変遷する過渡期の形態が「足入れ婚」だとする考え方もあります。但し、北関東などでは、足入れは夫婦の相性を試す試験期間という意味合いが強かったようです。野田市の場合は婚家の仕事を覚える期間ともされていました。

さて、女性が結婚して妊娠・出産しますと、かつては「血の穢れ(けがれ)」があるといわれたものです。野田市では産後 21 日間は「血ブ(ボ)クがかかっている」といい、「陽にあたるのは恐れ多いから外出するな」「神棚も拝むな」「台所に入るな」「食事も家族とは別」とされ、産婦は一切の仕事をせず食事も持ってきてもらって一人で食べました。そして、産後 21 日目は晴れて「オボ(ウブ)タテ」の祝いとなります。この日鎮守にお宮詣りをし、組合や親戚の人々を招いてご馳走します。また大神宮様の前に子供の名前を貼り出して披露したりしました。この日を境に産婦はまた日常の嫁の生活に戻るのです。現代の医療においても産後 1 ヶ月あまりの産褥期(さんじょくき)は休息をとる必要性がいられています。「穢れている」というと悪いことのように思われますが、嫁の労働が期待されていた時代、「何もしてはいけない」という習俗は産婦には有難いものでもありました。

なお、「オボタテ」と同様の習俗は、一般に「産屋明き(おぼやあき)」などといわれ全国的に見られます。ただ、「オボタテ」という呼び方からは、「オボ(産)の忌(いみ)が明ける日」というよりも、産婦と生児を守ってくれていた「オボ(産)の神が出立する日」という意味がうかがえるようです。

《詳しくは…》

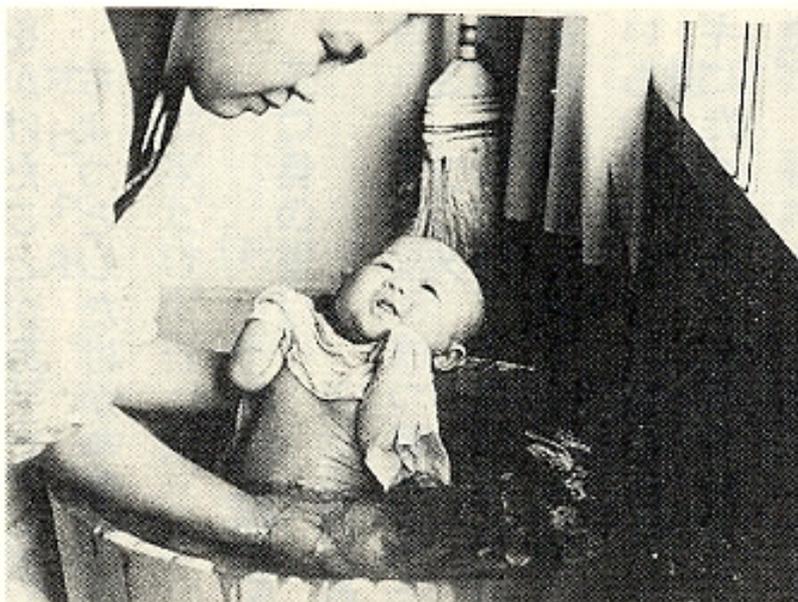
* 『野田市民俗調査報告書』各号 野田市

昭和 15 年の「頭洗い」

結婚して 1 週間くらいすると
嫁は頭を洗いに実家に帰った



新生児の入浴



初宮参りと赤飯のお裾分け
(東金野井 天神社)

